

# 大学院商学研究科・商学研究公開シンポジウム

## 東日本大震災 企業の対応と事例を報告



大学院商学研究科と商小売企業で震災対応を担った2氏を招き、「東日本大震災への企業の対応と復興への展望」と題する公開シンポジウムを、1月19日、神田キャンパスで開催した。写真。

東日本大震災発生後、多くの企業が被災地支援や企業活動を再開に向け精力的に取り組む、早期復旧を目指してきた。災害リスクの高い日本における企業のリスク対応のあり方や復元力について、研究と企業事例の両面から検証した。

まず、商学研究科長の渡辺達朗商学部教授のあいさつと趣旨説明に続き、大学院商学研究科長の上田和男商学部教授が「東日本大震災と企業の復元力」をテーマに講演し、「企業の復元力の源となる三つの指標は、リスクを直視すること、企

# 社会科学研究所シンポジウム

## 経済・泉准教授ら講演 原発問題 手がかり探る



▲講演する泉留維准教授

12月17日、生田キャンパスで社会科学研究所の公開シンポジウム「原発事故とエネルギー政策の転換」が開催され、3氏の演説が行われた。写真。約40人が聴講。司会を兵頭淳史経済学部教授が務めた。開会にあたり、社会科学研究所長の町田俊彦経済学部教授が「今後、原発問題をどう見極めていくべきか。その手がかりを探りたい」とあいさつ。最初に清水修二福島大学副学長が、地元福島で散の現状と課題」と題

た立場から「原発立地地域の経済と地方財政―福島県双葉地域を中心に―」と題し、福島県双葉町の現状や原発立地をめぐる問題点を報告。「福島県双葉町への迷惑施設・原発の集中立地の見返りに、電源交付金が配分されてきたが、原発事故による損害と比較すれば僅少」と報告。「原発の廃炉で失われる1万人分の雇用創出が課題」と語った。

続いて野口邦和日本大学専任講師(福島大学客員教授)は、放射線防護の見地から「放射能拡散の現状と課題」と題

最後に泉留維経済学部准教授が、「脱原発と再生可能エネルギーの可能性」と題し、山口県の上関原子力発電所建設計画から見える、さまざまな問題点と再生可能エネルギーを導入し脱原発のシナリオをどう描いていくかについて報告した。

報告後の質疑応答では聴講者から多くの質問や意見が寄せられ、活発な意見交換が行われた。

## 学生から活発な質問

### パキスタンとイラクの駐日大使が講演会

パキスタンとイラクの駐日大使を迎えた2つの法学部学術講演会が神田キャンパスで開かれた。12月8日はパキスタンのヌール・ムハマド・ジャドマニ大使、同15日はイラクのルクマン・フェーリ大使。両大使とも本学講演は2回目。いずれも広瀬孝子教授が進行役になり、大勢の学生が傾聴、活発な質疑応答が行われた。

パキスタンのジャドマニ大使は「現在のパキスタンと米国の関係は難しい状況にある。今日お話ししたことがパキスタンのみならず、南アジア全般の理解を深めることになればと期待している」と、パキスタンの対米政策について語った。

独立以来続く隣国インドとの不安定な関係が米国の軍事的支援を必要とすることや、経済発展のための経済的・技術的援助を求めたことが、パキスタンが米国の協定路線を選択した要因だが、近年は中国、アフガニスタン、イランなど近隣の国々の存在も、パキスタンの外交政策を左右する重要なファクターとなっている。

大使は「2001年9月の米国での同時多発テロにより、米国とイスラム教国であるパキスタンは、それぞれ自国の安全保障を注視するようになったこと、②昨年5月首

## 対米政策の現状語る

パキスタンのジャドマニ大使は「現在のパキスタンと米国の関係は難しい状況にある。今日お話ししたことがパキスタンのみならず、南アジア全般の理解を深めることになればと期待している」と、パキスタンの対米政策について語った。

独立以来続く隣国インドとの不安定な関係が米国の軍事的支援を必要とすることや、経済発展のための経済的・技術的援助を求めたことが、パキスタンが米国の協定路線を選択した要因だが、近年は中国、アフガニスタン、イランなど近隣の国々の存在も、パキスタンの外交政策を左右する重要なファクターとなっている。

大使は「2001年9月の米国での同時多発テロにより、米国とイスラム教国であるパキスタンは、それぞれ自国の安全保障を注視するようになったこと、②昨年5月首

## 国際社会復帰の年に

イラクのフェーリ大使は「イラクの情勢や復興に向けた民主化の動きについて、1時間半にわたって講演。多民族による多様な歴史や、多数の国々に囲まれた立地を考慮することがイラク理解のポイントである」と結んだ。

また今後のイラクの前進に必要な聴講した学生から多数の感想が寄せられた。

「パキスタンにはイスラム原理主義者がはかりがいて思っていたが、大多数の国民は近代国家を作ろうとしていることがよくわかった」(パキスタン)▽「あれほど多様なに富む国とは思わなかった。一言で片づけられない複雑な社会がある」▽「マスコミの報道をうろみにはいけないことがわかった」(以上イラク)と発見の大きさを表していた。



▲パキスタンのジャドマニ大使



▲神田キャンパスで初開催され117人が来場した

## 神田キャンパスで大学院進学説明会

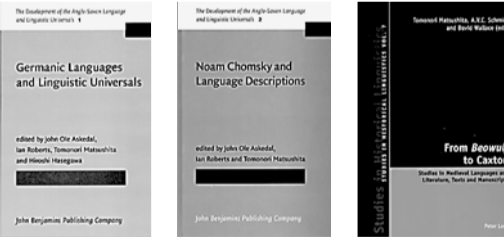
大学院への入学を希望する大学生、大学院生、社会人、外国人留学生などを対象とした「大学院進学説明会」が12月17日、神田キャンパスで初開催された。117人が来場し、各研究科の教員らによる個別相談などを受け、大学院ガイドなどの配布資料を手に入れた。

## 「Anglo-Saxon 語の継承と変容」プロジェクト

### 国際性を発揮し海外で出版4点

2005年度に文部科学省により私立大学オープンリサーチセンター事業の選定を受けた社会知性開発研究センター/言語・文化研究センターの「Anglo-Saxon 語の継承と変容」プロジェクト(5年間)は、ゲルマン諸語(古アイスランド語、ドイツ語など)を視野に入れて古英語から現代英語に至る英語学、認知心理学を含む生成文法理論、さらに、西洋古典、イタリア・ルネッサンス文学、中世フランス文学を含む中世英文学の研究を行った。

本プロジェクトの大きな目標は、日本における中世英文学と言語理論の研究を世界に発信することである。既に、「ニュース専修」で紹介された専修大学出版局からの専修大学写本ファクシミリ『ポリクロニオン MS1』、『薔薇物語(羊皮紙写本) MS2』



と『薔薇物語(紙写本) MS3』を中心とする全14点に次いで、4冊の海外からの出版を行った。

まず、John Benjamins社から出版された理論言語学の図書である、Askedal, Roberts, Matsushita and Hasegawa編による *Germanic Languages and Linguistic Universals* には、長谷川宏教授、濱松純司教授、東裕美准教授の理論研究論文を含む10編が掲載されている。

次に、同社から Askedal, Roberts and Matsushita 編の *Noam Chomsky and Language Descriptions* が出された。生成文法の創始者である、MITの Noam Chomsky

教授から草創期の3論文を寄稿していただき、濱松純司教授と宮前和代教授が論文を載せた。全部で10編から成る。

さらに、Peter Lang社から中世英文学関連の図書を刊行した。Matsushita, Schmidt and Wallace eds. *From Beowulf to Caxton: Studies in Medieval Languages and Literature, Texts and Manuscripts* には、A.V.C. Schmidt (Oxford), Helen Barr (Oxford), Sylvia Huot (Cambridge), Patrick O'Neill (University of North Carolina at Chapel Hill) などの海外の研究者からの論文を含む14編から成る、国際色豊かな出版物となった。

また、同社から、客員研究員の Tadao Shimomiya氏による *Alliteration in the Poetic Edda* が単行書として刊行された。

今後も国際的なレベルで専修大学での研究を発信し続けることが望まれる。(文学部教授・松下知紀)